

『歓喜への伏線』(ヨハネの福音書 19章 31-42節) 2023.3.26.

<はじめに> イエスは十字架上で息を引き取られ、ここでは遺体の処置と葬りが描かれています。イエスの生涯のエンドロールです。しかし、ここにも見逃してはならないことが綴られています。

I 死体をどうする(31-34)

①大いなる日(31)

この日は金曜日、しかも過越の祭りが始まる前日で、神殿では午後には過越の子羊を屠る礼拝が行われていました。同じ頃に「世の罪を取り除く神の子羊」(1:29)なるイエスが息を引き取られました。安息日が始まる日没は数時間後に迫っていました。

②ユダヤ人の関心事(31)

十字架刑は数日にとわたることもあり、ローマでは見せしめのために死体をそのままさらすのが常でした。ユダヤ人たちが脚を折って死体の取り降ろしを願ったのは情けではなく、死を確実に早め、大切な過越の祭りを汚さぬよう律法を順守したまでです(申命 21:23)。

③脇腹を槍で(32-34)

ローマ兵がイエスだけ脚を折らなかつたのは、すでにイエスが絶命していたからです。しかし一人の兵士がイエスの脇腹を槍で突き刺すと、すぐに血と水が流れ出ます。さらし者にできないなら、辱めを与えようとする正義に潜む残酷性のなせる業です。

II 証言・預言・伏線(35-37)

①目撃者の証言(35)

目撃者の証言は重要証拠となります。目撃者が誰であったかには各論がありますが、記者ヨハネはその人を知っていて、その人格と証しが真実であると保証します。そして、読者にもこの証言を信じ受け入れるようにと訴えます。あなたはこれを信じますか。

②聖書の成就(36-37)

36節に言及されている聖書は詩篇 34:20、37節はゼカリヤ 12:10です。また出 12:46の過越の子羊の骨は折ってはならないとの律法の規定は予表です。この出来事一つ一つが遙か昔から預言されていたことの成就です。十字架は神の御計画だったと分かります。

③復活の主への伏線

3日後にイエスは復活されます。この箇所の記事と証言は、復活を否定し信じない諸説を覆すものです。イエスは確かに死なれましたが、確かによみがえられました(I コリント 15:3-5)。手と脇の傷跡が本人であることの揺るがない証拠です(20:20)。

III 会葬者たち

①アリマタヤのヨセフ(38-42)

裕福な議員でありながら、密かにイエスの弟子であった彼が、勇気を出してピラトに遺体引き取りを願い出、処刑場近くの園にあった自分所有の新しい墓(マタイ 27:60)にイエスを急ぎ葬ります。きれいな亜麻布も彼が用意したもの(マルコ 15:46)でした。

②ニコデモ(39)

彼も議員で、イエス信奉者でした(3:1-2)。イエスの埋葬のために没薬と沈香約 33kg ほどを携えて来ました。彼らは協力して、日没までに埋葬の習慣に従ってイエスのからだを香料と一緒に亜麻布で巻いて墓に納め、入口には大きな石で封をします(マタイ 27:60)。

③見ていた女たち(マルコ 15:47、ルカ 23:55)

慌ただしい葬りの中、イエスのからだに墓に納められる一部始終をイエスに従う女たちがずっと見届けていました。安息日が明けたなら、再び墓参りに来るためです。これらの事実と見証も、イエスの復活を確かなものとする証拠となり、喜びの知らせの土台となります。

<おわりに> 沈痛なイエスの死と葬りの中にも、神様は来たる復活の喜びの布石を置いておられます。私たちが厳しく辛い場面を通されるとしても、イエスをよみがえらされた神様は喜びと勝利を保証されます。神様はみごとに伏線回収される御方です。「私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます」(II コリント 5:7)。(H.M.)